

No. 66 2010 年

日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室 TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557
<http://www.niccho.com/> email: webmaster@niccho.com

新たな出発—公益社団法人として—



第40回日彫展 記念講演会 (2010.6.27)

理事長就任のご挨拶

新たな出発

—公益社団法人として—



公益社団法人

日本彫刻会 理事長

能 島 征 二

本会はこの度、内閣府より新制度の公益社団法人として認定を頂戴する運びとなりました。以前の社団法人に比し、より高い公益性を求められることとなります。私どもは彫刻芸術の制作・研究に邁進し、真に高い公益性を追求するべく、一層の努力を重ねてまいる所存です。

これまでの会員並びに関係各位、一般鑑賞者の皆さまのお力添えに深謝するとともに、今後、益々のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて私は、本会の過渡期ともいえるこの時期に理事長を拝命致しましたが、その重責に身の引き締まる思いでございます。日本彫刻会は、昭和22年発足以来、名称の変遷を辿りながら63年の歴史を刻み、歩み続けてまいりました。本年6月、本会は、社団法人としての設立40周年記念展を終え

ましたが、新法人の認定に向けて、新たな公益性の高い企画を主催してまいりました。これらを踏まえながら、新法人として再出発する本会の事業について、次に述べます5つのことを私の提言としたいと存じます。

まず、本会の主要事業である日彫展をはじめとする展覧会を、より活性化させたいと考えております。見やすい展覧会とするための展示空間の工夫は緊急の課題です。また、現代の動向に注視した表現を評価し、若手作家を育成することが必要と考えます。さらに研究会や講演会を実施することにより、古典から現代に至る彫刻表現について最新の研究を知る機会を設けます。これらの事業内容が作家の制作に還元され、一般鑑賞者の皆様の彫刻理解の一助となればと考えております。

次に彫刻芸術に関する専門的研究誌等の出版を

充実させてまいります。会報やアートライブラリーを充実させることにより、会員、一般鑑賞者の皆様により深く彫刻を理解して頂けるよう誌面を工夫致します。殊にアートライブラリーは専門誌としての性格を強化し、中長期的に彫刻芸術の専門学術誌を目指します。

3番目に広報活動の強化があります。時代の要請もございりますが、本会の事業内容についてホームページ上で即時性をもって、会員、一般鑑賞者の皆様にお知らせ致します。

4番目として彫刻展のバリアフリー化です。本会がこの10年来推し進めてきた視覚障がい者の皆様に向けた「触れる彫刻鑑賞プロジェクト」を、社会貢献の意義を強化しながら実施致します。

5番目はサポーターの方々とともにある会を指すことです。一般鑑賞者と、会員とが相互に連携しながら、公益社団法人としてさらに幅広い活動が出来るよう「友の会」の実現を計ります。

以上、5つの提言は、すぐに取り掛かれることも、やや時間を要する願いも含んでおります。私このの存念をご賢察頂ければ幸甚に存じます。会員、関係者、一般鑑賞者の皆様におかれましては、どうぞお心にお留め頂き、本会の新たな出発に際し、格別のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが皆様方のご健勝と本会の隆盛を祈念し、理事長就任のご挨拶とさせていただきます。

委員長就任のご挨拶



日本彫刻会 委員長 瀬戸 剛

この度、理事会において委員長の大き役を仰せ付かりました。

非力ながら、新理事長の能島征二先生のご指導のもと、有能な新委員の皆様と共に、職責を果たして参りたいと存じます。

価値観の多様化の時代の中で、伝統ある日彫会も、今、様々な問題に直面しております。「社会の中での公募団体」とは何かを問い続けながら、今日的な仕事を目指す作家集団としての日彫会の、新たな活性化に向かって、少しでもお役にたてますよう努力して参りたいと存じます。

皆様方のご支援とご協力をお願い申し上げます。

第40回記念日彫展開催記録

去る6月23日(水)より7月5日(月) 新国立美術館において第40回記念日彫展が開催されました。入場者数は9495名と、前回展より1000人近く増となりました。記念事業として行われた「記念講演会」や、新たな試みである受賞作品を中心とした「彫刻研究会」といった企画がこの結果につながったと考えられます。なお詳細は次の通り。

- 1、会期 平成22年6月23日(水) ～7月5日(月)
- 2、会場 国立新美術館3階展示室3A
- 3、搬入総数及び陳列点数
搬入総数 371点
陳列点数 368点
- (内訳)
会員 260点 応募 39点
遺作 3点 無鑑査 4点
会友 62点
- 4、入場者数 9495名
(内訳) (小学生を含む)
一般 143名 学生 23名
団体 0名 招待状 4386名
招待券 566名 出品者 1334名
日曜日無料 2848名
障がい者手帳をお持ちの方 82名
付添者 42名 70歳以上、子供 71名

5、日彫展開催中の鑑賞支援活動

●作家が語るの鑑賞会(初日、最終日以外実施)
通算参加者 172名

●触れる彫刻鑑賞プロジェクト
通算参加者 7名

・タッチツアー(希望者の申し込みにより実施)

・盲学校鑑賞教室
6月25日(金) 7名

・筑波大学附属視覚特別支援学校
高校生 19名 引率者6名

・東京都立久我山青光学園
小学生 9名 引率者8名

7月2日(金)
東京都立葛飾盲学校
中学生 7名 引率者5名

7月2日(金)

東京都立葛飾盲学校

中学生 7名 引率者5名

地方展

第40回 日彫東海展

会期 平成22年7月7日(水)～7月11日(日)

会場 愛知芸術文化センター愛知県美術館ギャラリー

陳列点数 96点 入場者数 2165名

「触れてみる彫刻展」
参加者5名 付添者9名

中日賞 中川鈴子「大悲」

東海テレビ賞 近藤英子「さわやか」

第40回 日彫北陸展

会期 平成22年7月14日(水)～7月19日(月)

会場 富山県民会館美術館

陳列点数 89点 入場者数 1658名

北陸日彫賞 石田陽介「a statue 10」

富山新聞社社長賞 二塚佳永子「韶華」

第40回記念日彫展



会場風景

日本彫刻会は、毎年6月下旬から7月上旬にかけて約2週間国立新美術館に於いて「日彫展」を開催しております。
準備、搬入、展示や会場作り、図録の等の出版物の発行など運営全般をすべて会員の手によって行っています。
今年も、40回目を記念して「第40回記念日彫展」と銘打ち、記念講演会と彫刻研究会を特別企画として会期中に開きました。その甲斐あって今年は入場者数が例年に比べ、1000人増と飛躍的に伸びました。
本会はこの11月をもって公益社団法人と認定されました。これを期にいっそう社会貢献の場を広げ、彫刻という文化に向き合っている姿を情報発信しながら活動ぶりをより多くの方々に知っていただくこうとしていくところです。



展覧会図録編集風景

既に5年前から「触れる彫刻鑑賞プロジェクト」と「ギャラリートーク」を会期中、鑑賞にこられた一般の方々に向けて行っております。
「どうも彫刻はよくわからない」「どのようなどころをみていけば良いのか」といった疑問をお持ちの方々にご理解いただけるように、いつでも当番の会員が対応できるようにしております。
どうぞお気軽に受付にお申し出ください。今後とも「観に来てよかった」「楽しかった」といった言葉をいただけるように頑張つてまいりたいと思います。
なお、本会ではホームページも開設しています。そちらのインフォメーションもご利用いただければ幸いです。



オープニングパーティ（ホテルオークラにて）



会場準備風景

作家が語る鑑賞会（ギャラリートーク）



「出品作家が語る鑑賞会」は会期中毎日、午後2時をめぐりにお一人でもご希望があれば当番の会員が解説にあたります。「彫刻の見方や魅力」「何を表現しようとしているのか」などのコンセプトを作者自身が説明する機会を設け、多くの皆さんに彫刻に親しんでいただくための試みに取り組んでおります。

本来作家は多くを語らず、ひたすら作品勝負で続けてきた仲間も多いのですが、情報社会の昨今、時代の要請に応える形で来場者にアピールしようと始めた企画です。

最近では、これを楽しみに来てくださる方も多く、励ましの言葉をかけてくださる方もいます。

触れる彫刻鑑賞プロジェクト

◆タッチツアー



「タッチツアー」は初日と最終日を除き、いつでもご希望に応じられるようになっています。付き添いの方も無料にてご参加いただけます。どうぞホームページでご確認ください。

◆盲学校鑑賞教室

視覚に障がいを持つておられる方々にも鑑賞していただくために「触れる彫刻鑑賞プロジェクト」を企画しています。これは一般の目の不自由な方を対象とした「タッチツアー」と盲学校を対象とした「盲学校鑑賞教室」の二つの活動を行っていきます。小中高を問わず、広く門を開けてあります。すでに学校行事として定着している学校もあります。



第40回記念日彫展

受賞作品

西望賞

「走」

堀 龍太郎



西望賞審査員 真室 佳武 先生

(美術評論家・東京都美術館館長)

(審査講評)

日本彫刻会は、このたび、盛大に第40回展を迎えられました。心からお祝いを申し上げます。

国内最大の彫刻研究団体として、日本の彫刻の発展と振興に寄与されてきたことに深く敬意を表します。

同会は、長年にわたって、具象彫刻の研究を中心に据えて制作し、発表されてきました。

彫刻の本質を見据えて、幅広くその可能性を追求することを目標としてこられました。そして日頃の研鑽の成果を一堂に集めた日彫展は、その素晴らしい多くの作品によって人々に感動と喜びを与えて参りました。

審査員

《審査員長》 蛭田二郎
 市村緑郎 宇治川久司 松田裕康 青山三郎
 安藤孝洋 小野啓亘 竹谷邦夫 成富 宏
 堀内秀雄 山下 清 伊庭靖二 九後 稔
 野村光雄 一鉄田徹 (以上十五名)

今回、最高賞であります西望賞の選考に係わらせていただき、光栄に存じますとともに、その責任の重さを痛感しております。審査にあたっては、表現の意図や主題、全体的な量感や動勢、バランス、調和などのほか、人物の手足の指の表現など、細部にまで神経が行き届いているかどうかも大事な視点ではないかと考えました。これは、多分に作品の質や密度に係わっているように思えたからです。

その結果、何点かの作品が目にとまりました。なかでも、堀龍太郎氏の「走」は、革のジャンパーにジーンズ姿のやや前傾姿勢の人物像で、高い完成度を見せていました。オートバイを乗り回す現代女性を連想させる主題の斬新さもさることながら、その堅実で的確な表現は、西望賞にふさわしい作品と判断しました。

その他、注目された作品として、大丸敏「想う」、吉居寛子「黙想」、安田陽子「潮音」、山崎茂樹「読書」、川田良樹「としごろ」、神谷健司「蒼い時代」、鈴木真帆「つよく」などを挙げておきます。

最後になりましたが、日彫展のますますの発展と、出品者の方々の大いなる活躍を心から祈念申し上げます。

日彫賞



「彼女の椅子」
高石 麻代



「水の底に眠る砦」
木田 詩子



「仔山羊と人」
白石 恵里

優秀賞

小西徳泉 外山良治
 廣川政和 安田陽子
 高砂晴光

新人賞

石井沙知 市村成保
 竹田篤生 升田幸太郎
 山本将之

日彫展彫刻研究会

今年の第40回記念日彫展では記念事業として、彫刻研究会が行われました。記念講演会とともに、彫刻研究会は2つの記念事業の一つとして企画されました。目的は受賞者が会場でそれぞれ自作の前で制作の意図や、素材、表現方法などを述べ、その作品に対し、審査員が授賞理由、作品の講評を行い、より深い彫刻研究の場とすることでした。これまでの日彫会にはなかったことで、新しい企画でした。受賞者にとっても、審査員にとってもチャレンジであったと思いますが、日彫会の目的でもある作品発表とともに、彫刻研究の場であることが再確認されたことでした。「具象彫刻の可能性とは、とてつもなく広く、深いもの」蛭田前理事長の言葉でしたが、作品を発表し展示しただけでは学びえないことが彫刻研究会の場を通して伝わったのではないのでしょうか。



語っていただきました。西望賞は当日の表彰式での発表でしたので、過去の受賞者お二人に若い受賞者が肩の力を抜いて頂くために、露払いのコメントをしていただきました。若手受賞者の作品に対しての思いや表現の意図を語る姿は興味深く、若き日の純粹に取り組んだ日を思い、自己の制作に照らし合わせ、新鮮な感動覚ええました。特に、今年の受賞者は学生、女性の活躍が目立ち、多くの先輩方や聴衆に囲まれ、自作について語ることは緊張し勇気がいったと思います。鑑賞者にとっては受賞作品と作家の顔が一致し、より深い鑑賞の機会となったでしょう。そして、それぞれの受賞作に対して審査員から講評がありました。

今回の第40回展の入賞審査では、審査員は自分の推薦する作品を記名式で票を投じました。審査員にはそれぞれが推薦した作品についての講評をお願いいたしました。審査員も会衆の前で受賞作品の講評することはなかなか緊張することでしたが積極的に引き受けてくださいました。今回のように審査員が彫刻観や、彫刻に対しての見方感じ方など語ることは、受賞者だけでなく、鑑賞者に対しても彫刻理解を深めるきっかけになり、まさしく彫刻研究の場となった



ことと思います。400人も会員が、作品を並べただけではなかなか交流することはできませんが、作品を前にしての彫刻研究は作家同士の交流にもなつたでしょう。

また、これまでも個人的に審査員の先生方に作品講評していただく機会もあつたとおもわれます。しかし、そのような学びは共有されることなく個人のものでしたが、今回の公開彫刻研究会は一般鑑賞者や作家同士の研究交流の場となり得たのではないのでしょうか。第40回記念展として、委員一丸となり、初めての企画が実施されました。90分間でしたが密度のある、充実感の残る彫刻研究会となりました。

記念講演会

「ギリシア美術史と現代彫刻」

美術史家 中山 典夫 先生

第40回記念日彫展では、美術史家 中山典夫先生による記念講演会が行われました。展覧会会期中の6月27日(日)、午後3時から国立新美術館3F講堂にて「ギリシア美術史と現代彫刻」と題された講演会には本会の会員・会友を始め、多くの一般の方々も参加し、聴講者は総勢185名となりました。

中山先生にはこれまで、本会の研究誌である『アートライブラリー』に「ギリシア美術史と現代彫刻」をシリーズで4回にわたり寄稿していただいております。美術史の専門家立場から彫刻芸術に対する見解を頂戴してきました。今回の講演会ではこれまでに寄稿された論考を踏まえ、彫刻芸術が隆盛を誇った古代ギリシア美術を通して、現代における彫刻表現のあり方とその展望を語っていただきました。以下に、簡単にではありますが、その概括を紹介したいと思います。

講演会はギリシア・ローマ時代の彫刻《ベルベデーレのアポロン》《ラオコーン》をスライドに写し、洗練された当代の彫刻芸術を見ることに始まりました。そして、《ラオコーン》が1506年にルネサンス期のローマで発掘された際のミケランジェロとのエピソードや、近代においてオマージュとして制作されたザッキンの作品を挙げ



ながら、この彫刻がその後の時代にどのような影響を与えたかについて紹介されました。

ギリシア時代への賛美は古典回帰運動として、18世紀後半の新古典主義へと結びつきます。スライドに写された古代の三美神と、カノーヴァ、トルバルセンの同主題の彫刻の比較から当時のヨーロッパにおける古代芸術への関心の高さをうかがい知ることができました。

新古典主義が甘美な写実と理想美をギリシア美術に求めたのに対して、ロダンやマイヨールは異なった感化を得ています。コントラポストが強く意識されたロダン作《青銅時代》は確かに《ドリュポロス》と比較される作品です。しかしながら、

トルソという不完全な形にて完成作品として提示されたロダンの《歩く人》は忠実に再現された表層の優美さではなく、内的生命の表現を意図したものであります。また、マイヨールが1908年にギリシアを旅行した際には、流麗な優美さよりも素朴な力強さが際立つ時代の作品に魅了されました。マイヨールにおいては、古典前期の彫刻から受けた感銘が静謐な自己の表現につながっているのであります。

ギリシア美術は後世へ多大な影響を与えており、その表れ方も様々です。ヘレニズム初期の過酷なりリズム、さらなるその極端な表れともいえる現代のスーパリアリズムについて触れ、ロン・ミュエクが一例として挙げられました。

講演のまとめにはサモトラケの《ニーケ》とベルガモンのレリーフを挙げ、彫刻が内在する生命の躍動や秘められた活力について論究していただきました。彫り出す前は無機質な石材、そこに与えられた命、これらの彫刻が発する圧倒的な存在感は現代においても未だ新鮮な輝きを放つものであります。ここに現代彫刻の明日への展望の一可能性を語り、講演は締めくくられました。

第40回記念日彫展

記念講演会

・講演題目

「ギリシア美術史と現代彫刻」

・講演者

美術史家 中山典夫 先生

・開催日時

6月27日(日)午後3時

・場所

国立新美術館3F講堂

・聴講者数

185名

東京彫刻散歩Ⅱ

《弓を引くヘラクレス》

エミール・アントワーヌ・ブールデル
(Emile Antoine Bourdelle 1861～1929)

設置場所 千代田区神田駿河台4丁目3番地

新お茶の水ビルディング内



H248cm×W240cm×D90cm ブロンズ 1909年(日本出版販売株式会社所蔵)

JR御茶ノ水駅聖橋口からほど近く、本郷通り沿いに建つ「新お茶の水ビルディング」。地上22階建てのこのビルの1階エントランスに、今回とりに上げる作品《弓を引くヘラクレス》を見ることができます。

《弓を引くヘラクレス》は言わずと知れた、エミール・アントワーヌ・ブールデルの彫刻芸術を代表する作であり、近代彫刻史における不朽の名作に位置付けられる作品です。大きく捉えられた量塊の積み重ねによって組み立てられた本作は、しばしば「堅牢な構築性」という言葉で形容されるその芸術をよく感じさせるものであります。

1861年、南仏のモントーバンの家具職人のもとに生まれたブールデルは、幼い頃よりものを作ることを目の当たりにして、13歳の頃には父の仕事を手伝っていました。1876年からトゥールーズ市の美術学校に入学して美術を学び、1884年にパリのエコール・デ・ボザールに入学しますが、教育方針に不満を感じて中退してしまいます。その後サロンに出品し始めたブールデルは、1893年よりオーギュスト・ロダンの助手を務めるようになります。以後15年間に亘り、ブールデルはロダンに随伴することとなります。

ブールデルは同時代においてロダンの仕事をもっとも近くで見ていた彫刻家であるといえるでしょう。しかし同時に、ロダンという偉大な師の支配的な影響から、強い決意と自信を持って、もつとも自己を確立することができた彫刻家でもあります。そんなブールデルにとつても、師のものと離れてまもなくの制作であった《弓を引くヘ

ラクレス》は記念碑的作品であったのではないでしょう。作品が発する威圧的とも言える卓抜た力強さは、自己の制作を渴望する作家の思いも表れているようにも感じられます。

本作は、日本出版販売株式会社の本社である当ビルが1981年に竣工された当時よりエントランスに設置されており、今日でも威風堂々とビルの玄関となる空間に彩りを与えています。同社は他にも彫刻を所有しており、オシップ・ザツキン作《三美神》や流政之作《酒は涙》《肌あわせ》が設置され、見ることが出来ます。作品は一般に公開されており、ビル内に置かれた《弓を引くヘラクレス》《三美神》は許可なくの撮影を禁止されますが、いずれの作品も近接して鑑賞することが可能です。

近代彫刻の名作を改めてじっくりと味わってみるのはいかがでしょうか。

〈散歩のご案内〉

～ 周辺 ～

JRお茶の水駅近くにあり、周辺には湯島聖堂、ニコライ堂、2つの聖堂をつなぐ聖橋があります。

～ 行き方 ～

JR

御茶ノ水駅聖橋口より徒歩1分

東京メトロ

丸ノ内線 御茶ノ水駅より徒歩4分

千代田線 新お茶の水駅より徒歩1分

初めて彫刻展をみる方へⅡ

制作の現場から

石膏取り

皆さんが展覧会場でご覧になっている作品の多くは石膏や樹脂FRPで出来ています。

前回ご紹介しましたように形を形成していく時は水粘土で作ります。粘土の重さだけでも200kgあります。粘土の状態では保存することも不可能ですし、会場まで運ぶこともできません。

そこで、粘土で作られた作品を石膏や樹脂に型取りをして写し替える作業を石膏取りといいます。

★型作り

まずは外型を石膏で作ります。この仕組みを一般の方に想像してもらおうのがなかなかむずかしいのですが、いったい180cm×200cmの作品の型をどうやって作るのかがまず問題です。型は石膏で作ります。

まず、切金といわれる厚さ。0.2mm程度の真鍮やアルミの板を幅3cm長さ5〜10cmに切り、主に像の体の後ろの部分に差し込んで枠を作っていきます。周りを額縁のように区切っていきます。

粘土を残らず掘り抜けるように頭・背中・腕・足にかけて枠を作っていきます。これに石膏を像全体にかけていきます。(写真1) 粘土の像を厚さ2cmぐらいの石膏で覆いつくしたような状態になります。石膏は大変もろいものですから石膏の中に針金も埋め込みます。また全体を支えるため、垂木で補強します。(写真2)

★粘土抜き

切金で囲まれた部分はすっぽり外すことが出来ます。すると粘土の表面が現れます。ここから中の粘土約200kgを掘り出します。(写真3) すべて掘りぬいたところで型は完成です。

★流し込み

次に作品の本体となる内型を作ります。型の側に石膏やFRPを流し込んで中身を作っていくのですが、その前に外型と中身を剥がし易くするために離型材を塗ります。石膏の場合はカリ石鹼FRPの場合はアルギン酸とCMCを混ぜたものを塗ります。

離型材を塗った後、型の内側に石膏やFRPを貼り込んでいきます。作品は無垢ではありません。空洞になっていて中心には小割などの心棒で補強されています。石膏の場合は約1cm、FRPの場合は5mmぐらいの厚さになっています。型より中身を強化するためにスタップやガラス繊維を貼り付けてあります。(写真4)

★割り出し

型を砕いて取り除くことを割り出しといいます。木槌とノミで中まで傷つけないように細心の注意を払いながら中身を割り出して完成です。(写真5)



写真1



写真5



写真4



写真3



写真2

雨宮淳先生を偲んで

日本彫刻会 運営委員 佐藤敬助

茫漠と広がる海原と西の空を真っ赤に染め

ながら静かに沈んでいく太陽。夏の夕暮れのわずかな風を頬に受けながらじっとその夕日を見つめる雨宮淳先生のお姿がまだ脳裏に焼きついていきます。奥様と二人でその夕日を見に行きたいと話しておられたのは、亡くなられる数ヶ月前の話です。雨宮淳先生が初めて長崎大学に彫刻の講義にいらしてくださったのは、平成5年の夏でした。それからさらに数々の彫刻における制作暦を積まれるなかで、日本芸術院会員に就任され、日展常務理事や日本彫刻会理事長にも就任されました。また、彫刻の制作だけでなく教育にも従事されており、宝仙学園短期大学教授として後進の育成にもあたられておられました。そうした忙しいさなかに時間をさいて毎年講義にいらして下さり、多くの学生たちが先生の薫陶を受けて長崎の美術界と教育界に羽ばたいております。先生が事あるたびに話をされるようになったその夕日との出会いは、長崎にいらして下さるようになってからの何度目の大学の講義の疲れを癒すために学生を交えた皆で夕日を見ながら一杯やろうという話に

なったのがその起因といえます。先生の楽しく、そして厳しい指導の中に、学生はもとより私もどれほどいろいろな問題に目を見開かされたかわかりません。中でも、「芸術というのは、自由な世界の中にあります。芸術というのは、自由なのです。」という言葉が深く印象に残っております。そして、その他の多くの教えは、私はもちろん、多くの学生たちを飛躍的に成長させたことと思います。また、「人体の自然な動き」などの意味も含ませながら「自然」というものをいつも大切にされてきました。そして、それは、平成20年の三越の個展のときにそのテーマを「氣韻生動」とされた原点であったのかもしれない。個展会場で展示の中心となる「氣韻」「生」「動」の4作品にライトを当てながら検討されていた時に、ライトの光によって変化していく影の面白さに、「ほんとに興味深い」とおっしゃられて、そこで気に入った影も展示の一部として設定されていたことがまだ鮮明に私の中に残っております。

今年の2月8日にご逝去されましたが、私たちの中には、先生の芸術に対する熱意や教えがキラキラと輝き続けています。



平成22年度日本彫刻会総会報告

- 1 総会の種類 通常総会
 - 2 開催日時 平成22年7月23日(金)
午後3時
 - 3 場所 日本芸術院会館 講堂
 - 4 出席者 254名
本人出席 54名
委任状 200名
 - 5 正会員 316名 規定により総会成立
議事の経過及び結果
議事録署名人の選出
第1号議案 平成21年度庶務・事業報告承認
の件
第2号議案 平成21年度決算報告承認の件
第3号議案 会員状況承認の件
第4号議案 その他の件
全議案とも異議なく承認された。
- 報告事項
- 1、第40回記念日彫展の報告
 - 2、平成22年度日彫選抜展出品者の報告
 - 3、理事長及び常務理事改選の報告
理事長、常務理事は以下の通り。
理事長 能島 征二
常務理事 雨宮 敬子 橋本 堅太郎
川崎 普照 蛭田 二郎
市村 緑郎 山本 眞輔
 - 4、委員改選の報告
 - 5、公益社団法人移行進捗の報告

〈日彫会選抜展〉

- 会期 平成23年6月1日(水)～7日(火)
- 会場 日本橋三越本店
本館6階美術特選画廊

■出品者

中村晋也	能島征二	雨宮敬子	橋本堅太郎
川崎普照	蛭田二郎	市村緑郎	山本眞輔
瀬戸剛	神戸峰男	宮瀬富之	栗山賀行
圓鏝元規	石黒光二	石田陽介	石原昌一
上田久利	宇津孝志	江里敏明	小比賀強
親松英治	籠瀬満夫	柏原花子	勝野眞言
亀谷政代司	木内禮智	木代喜司	楠元香代子
久保浩	久保田俊通	寒河江淳二	佐藤敬助
佐藤隆男	柴田良貴	嶋田秀男	嶋畑貢
善本秀作	田中昭	谷口淳一	谷村俊英
堤直美	時光新吾	中村宏	西村祐一
早川高師	林昭三	堀豊之	堀内秀雄
堀尾秀樹	村井良樹	村山哲	山崎茂樹
山下清	山田朝彦	横山豊介	阿部鉄太郎
清家悟	寺山三佳	中原篤徳	中村優子
野原昌代	一鍬田徹	堀龍太郎	槇野仁一
吉岡徹			(以上65名)

第41回日彫展図録 掲載広告募集

現在、図録への広告掲載を広く募っております。会員の皆様のお身近に掲載希望の会社、各種学校等がございましたら、事務所までご連絡下さいますようお願い致します。(係)

計報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

正会員 熊谷 幸太郎 先生

平成22年4月

編集後記

◆新理事長の挨拶の中にありますように日彫会は新たに公益社団法人として生まれかわりました。日彫会は彫刻芸術の振興を目的として営々と活動を続けてまいりました。

現代の情報社会において、更に社会貢献との立場より、広くその活動を発信してまいりたいと思えます。今号より新委員での出発です。今後ともよろしくお願い致します。

◆第40回記念日彫展の特別企画「記念講演会」と「研究会」の模様を掲載いたしました。

◆「アートライブラリー」も発行に向けて着々と進めています。どうぞご期待ください。

◆日彫会報65号におきまして誤りがありました。謹んで訂正いたします。

7頁(写真)【誤】・(ニッセイ財団所蔵)

【正】・(日本生命保険相互会社所蔵)

8頁(慶事)【誤】・平成22年11月

【正】・平成21年11月

編集委員 加山総子・一鍬田徹・堀内秀雄
前芝武史・宮坂慎司・吉岡 徹

日彫会報 No.66 平成22年11月1日発行